

# 緑化樹木種子の成熟期、貯蔵、播きつけ法

## 1. 種子の採取時期

がおくれたり、時には発芽しない場合があるから注意する。

種子の成熟期は樹種、産地、親木の樹勢等によって異なる。主な樹種の採種時期及び貯蔵方法と特性の概要は表-1の通りである。そのため採種の時期、貯蔵方法などを適切にしないと、発芽

表-1 採種時期・貯蔵方法および発芽の特性

常落別	樹種	採種時期	果肉の有無	精選の方法	貯蔵の方法	まきつけ時期	発芽の特性
常	スヒノギ	10月		きゆう果採取、天日乾燥、脱粒、ふるい精選	ポリ袋に入れ冷暗処に貯蔵	とりまき 3~4月	翌春 当春
	アカマツ クロマツ	10		"	"	"	"
	コウヤマキ	10~11		"	ポリ袋に入れ冷暗処、土中埋蔵、冷蔵庫(5℃)	3~4月	翌々春 翌々春
緑	ツバキ サザンカ	9~10 <sup>中</sup>		陰干し、脱粒、水選	"	"	当春
	シラカシ	10		殺虫、水選	"	"	"
	スタジイ	10~11		"	"	"	"
樹	モチノキ	10 <sup>F</sup> ~12	有	果肉をつぶし水洗いして浮き種子を除く	"	とりまき 3~4月	翌々春 翌々春
	モッコク	10 <sup>F</sup> ~11 <sup>上</sup>	有	陰干し、脱粒、種皮を除く	"	"	翌春 当春
落	コブシ	9 <sup>F</sup> ~10	有	陰干し、脱粒、種皮を除く	ポリ袋に入れ冷暗処、土中埋蔵、冷蔵庫(5℃)	とりまき 3~4月	翌春 当春
	センダン	10 <sup>F</sup> ~11	有	水浸、果肉水洗除去	"	"	"
	ヤマモミジ	10		陰干し、翼除去、風選	"	とりまき 3月	"
葉	シデ	10		陰干し、脱粒、風選	"	"	"
	ツツジ類	9 <sup>F</sup> ~10 <sup>上</sup>		陰干し、ふるい選	ポリ袋に入れ冷暗処に貯蔵	2~3月	当春
樹	ナツハゼ	10	有	果肉をつぶし水洗い除去	ポリ袋に入れ冷暗処に貯蔵 冷蔵庫(5℃)	3~4月	翌春~翌々春
	イチョウ	10 <sup>中</sup> ~11 <sup>中</sup>	有	"	ポリ袋に入れ冷暗処に土中埋蔵、冷蔵庫(5℃)	とりまき 3~4月	翌春 当春

シイ・カシ・ナラ等はいずれも秋、自然に種子が落ちるのを待って採取することが多い。集めた種子の大半は、ゾウムシ類の幼虫が寄生しているため、殺虫処理(薬剤あるいは2~3日水浸処理)をしてから貯蔵する。これらの種子は休眠をしないで、適当な温・湿度があればすぐに発根をはじめ、翌春地上に芽を出す。したがって自然状態では落果後、その場で発芽してしまうため、10日以内に集めなければならない。できれば自然落果を待たずに竿や木登りなどで採種するのが望ましい。モチノキ・コブシ・ウメモドキ等のように秋季、果肉が色づく仲間は種子の成熟期がよくわかる。採取後できるだけ早く、果実を押しつぶして果肉と種子をわけ、必ず水洗い、陰干しをしてから貯蔵しなければならない。そのままの状態に貯蔵し、播きつけをすると発芽がおくれたり、まったく発芽しない場合もある。

ツバキ・サザンカ等は自然落果したものを集めるのが便利

だが、落果後はネズミ・リス・害虫などの被害を受けやすく、そのうえ乾燥すると発芽しにくくなる。そのため樹上に実があるうち早目に採取して陰干しし、種子がはじけ出したら種子だけを集め水選してから貯蔵したほうが効率的である。

シャクナゲ・レンゲツツジ等は種子の入ったサヤが黄色味を帯びたころ採取する。陰干ししてサヤが割れるのを待って、棒で軽く叩き、種子をとり精選して冷暗処に貯蔵する。ツツジ類の種子は非常に小さく、ひとつのサヤの中に十数粒から千粒近くも入っているものまである。

このほかケヤキ・モミジ・アカシデ等乾燥しすぎると発芽率が低下するばかりでなく、全く発芽しない場合があるから特に注意しなければならない。

## 2. 種子の貯蔵

種子は、熟したときに『とりまき』するのが最も適している。しかし、畑に播きつけると冬の寒さや虫害・獣害などの

影響をうけるため、一般には採種後3～6か月間貯蔵し、翌春3～4月の適期に播きつけることが多い。種子の貯蔵で最も注意することは、採種時の水分状態を持続させて、乾燥させないことである。そのためいろいろな方法がとられてきた。

### (1) 土中埋蔵

精選した種子に多少湿り気のある川砂（海砂は好ましくない）を混ぜ、地下30cm位の土中に埋蔵する。混ぜる割合は種子の大きさにもよるが、種子量と同量か倍量位が適当である。図-1のように素焼きの植木鉢とか木箱等を利用し、ネズミ

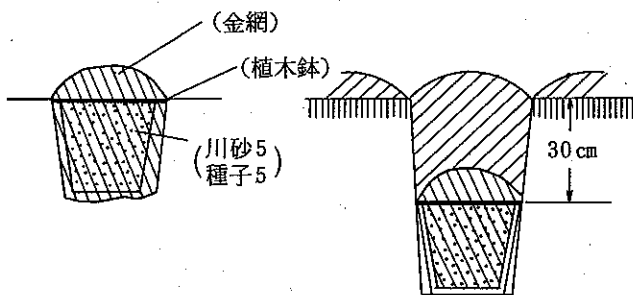


図-1 種の土中埋蔵法

などに食われないように金網などでつつむ。貯蔵する場所は、水がたまる場所や湿地はさけて、できるだけ水はけの良い木陰など温度変化の少ないところがよい。ただし縁の下は乾燥するため好ましくない。

### (2) 冷蔵庫の利用

少量の種子の場合は家庭用冷蔵庫がよい。庫内温度は5℃前後であるから、種子の休眠促進にもなる。ただ乾燥しすぎるから、種子をわずかに湿めらせてポリ袋に入れ播きつけ時期まで貯蔵する。湿らせすぎるとカビがはえたり、腐ったりするから注意する。

### 3. 播きつけと発芽

種子を播く時期は秋に『とりまき』する方法と貯蔵して翌春播く方法がある。種子の播きかたは、種子の大きさ・発芽の難易・床替の適否等によって異なってくる。大粒種子は一定間隔をおいて『すじまき』または『ばらまき』とする。小・中粒種子は床をつくってばらまきする方法が一般に行われている。一定期間休眠した種子は8～9℃になると休眠が破れて活動を始め、地温の上昇につれて発芽する。もし、活動を始めた種子を乾燥させたり、播きつけ時期が遅れたりすると、全く発芽しない場合や、秋になって一部発芽し、大部分は翌年の春発芽することがある。モチノキ・ガマズミ・ヒメシャラ等休眠期間の長いものは、とりまきしても、翌春播いた場合でも、一年すぎた春にならないと発芽をしない。そのため発芽しないものと判断するのは早計である。この場合夏季の除草や冬季の霜柱等播種床管理を怠ってはならない。

### (1) 床造り

基肥（1㎡当り堆肥3～4kg・化成肥料80～120g）とネキリムシ防除剤（1㎡当り6～9g）を畑一面に散布し、よく耕耘してから樹種ごとの区割りをする。中・小粒種子のまきつけ床は、一般に図-2のようなあげ床とする。除草・日

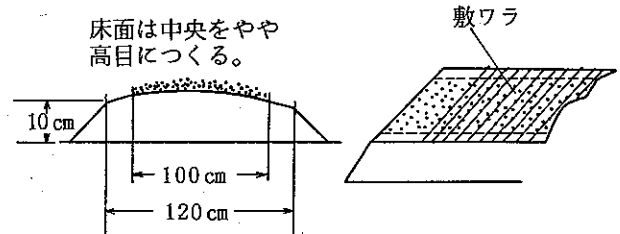


図-2 あげ床

覆・防寒等苗畑管理上、床は東西に長く、幅は1.2m以内・播き幅は1m前後とする。全面的に土塊をくぐらして、やや中高になるように床面を踏みしめてならし播種床とする。

### (2) 播きつけ

播きつけ量は樹種や種子の大小により異なるが、得苗予定数と苗木の大きさ、発芽率などを考えてきめる。例えばアカカエデの場合発芽率55%であれば、1㎡当り20gでは過密になるから10g位、クロマツで発芽率95%の場合も10g程度が適当と思われる。種子は床面に平均に播かなければならないから、播く量をわけて少しずつ丁寧に播く。覆土はふるいを用いて種子の厚さの2倍位を目安とする。厚すぎると発芽が悪くなる。その上に敷ワラをうすく並べて発芽を助ける。発芽をみたら敷ワラを取り除く。

### (3) 鉢や箱を利用した場合の播きつけ

ジャクナゲやレンゲツツジのような微粒種子や、少量しかない貴重な種子等は鉢や箱を利用して播きつける。まず、深さの八分目位に用土を入れ、手で軽くおさえながら表面を平らにならし、微粒種子は、ハガキ等を折りまげてその上にのせ、やや高目のところから、うすく平均に播きつける。覆土はしない。噴霧器などで静かに十分灌水する。このとき播いた種子が片寄ることがあるから注意する。あるいは鉢底から給水してもよい。播きおわれれば鉢の上をビニールで覆うか、板ガラス等をのせて鉢内の温・湿度を高く保つとよく発芽する。発芽が完了するまでは寒冷紗などを用いて直射日光をさける工夫も必要である。用土は水持ちがよく排水、通気性のよいことが大切で、水苔、ピートモスの単独、または混合で床土とすることが多い。このほか、川砂と鹿沼土・川砂とバーミキライトなど適宜混ぜ合わせたり、単独で利用することもよい。